

くによしじょうしかんれんいせき
25. 国吉城址関連遺跡

(国吉城址・栗屋勝久居館跡)

所在地：三方郡美浜町佐柿地係

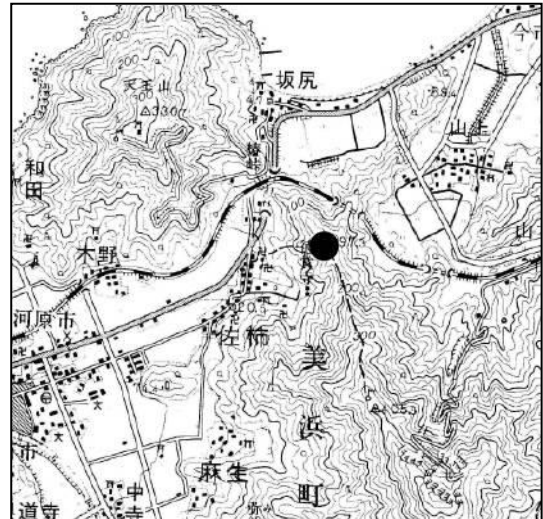
調査原因：国吉城址史跡公園整備事業

調査期間：平成 22 年 7 月 1 日～12 月 25 日

調査主体：美浜町教育委員会

調査面積：200 m²

時代：中世末～江戸時代初期



位置図(S = 1 / 50,000)

調査の概要 美浜町では、国吉城址とその周辺遺跡群を含む、佐柿区の歴史的景観の保存整備を図り、史跡公園として活用するため、平成 12 年度より確認調査を実施しています。今年度は、山城部本丸跡周辺の遺構確認調査を主に行いました。

遺構と遺物 本丸北西帯曲輪と連郭曲輪群Ⅱ郭を分断する堀切の状況把握のため、堀切の断ち割り調査を行いました。その結果、堀切の両斜面から上部が崩落した石垣が検出され、その様相が明らかになりました。

出土した石垣は、人頭大の石材が用いられ、裏込石の状況など、居館跡二・三段目石垣と同様の特徴がみられます。上層段が崩され、本丸側は高さ約 1.3m で 7 段程度、Ⅱ郭側は高さ約 1.2m で 4～6 段ほどが残存していました。なお、本丸帯曲輪側の石垣については、曲輪南端部で石垣の隅部が検出されました。

検出した石垣間による堀切の幅は、約 4 m を測ります。堀底部は、石垣の崩落石や石仏、土砂が厚く堆積し、箱堀状の底部から北側斜面へ落ち込んでゆく地形と、橋脚の礎石とみられる平石を東西石垣際でそれぞれ 1 基ずつ検出しました。連郭曲輪群Ⅱ郭側からは、橋に取り付くとみられる石列を検出しました。なお、同側地面は、地山の岩盤が露出しており、堀切掘削の際も、岩盤を大きく切り開いて分断したものと思われます。

遺物は、カラケのほか、播鉢やカメなどの国産陶器片、投棄された石仏や墓石(五輪塔残石)が出土しました。

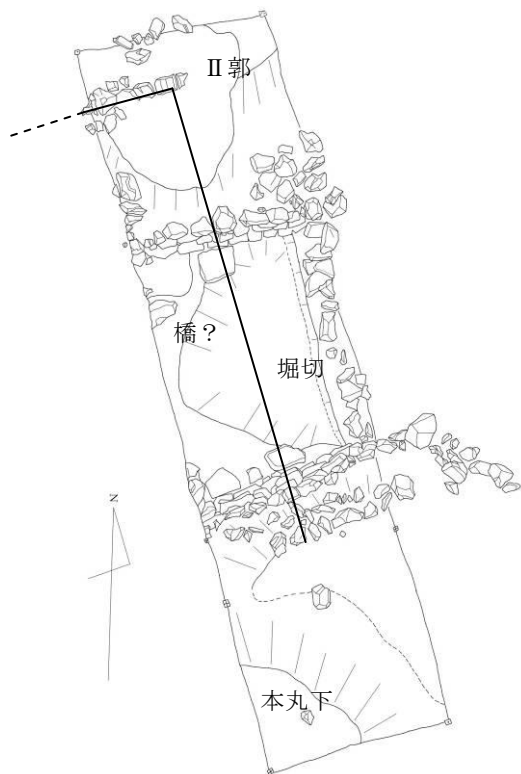
また、本丸北西虎口の前面空間へのアプローチとなる進入路付近の精査を行なった結果、東西及び南北方向の石列や石段を検出しました。本丸東側では、切岸面に平行して石が所々に並んで露出しており、精査したところ、木根によって隆起や沈下があるものの、東西方向に並ぶ石列を検出しました。

まとめ 本丸跡で、これまで縄張りの地形以外に目視上では確認できなかった城の痕跡を確認できたことは、大きな意義があると思います。

山城部の石垣は、遊歩道際の一部を除き、主郭部切岸面に大量の石の崩落痕跡がみられ、大半は失われているものと思われていたところ、居館跡石垣と同じように、石垣の上半分を崩

し、下半分は埋め殺されていたことが明らかになりました。これは、国吉城の破却状況を示すものとしても貴重な発見と思われます。

また、これら石垣の築造年代は、居館跡二・三段目石垣と同一的な特徴から、16世紀後半～末とみられます。築造の契機としては、天正11年(1583)の賤ヶ岳の合戦に対する備えや、その後の豊臣系大名木村常陸介定光の入城が考えられます。特に前者は、対柴田の備えとして城館の修築などを求めた天正10年(1582)10月21日付け丹羽長秀書状(山庄家文書)の宛名筆頭に『粟越(越中守勝久)、同五右(勝久の子、五右衛門勝家)』とあり、同時期に若狭口の最前線となる国吉城の修築を行った可能性は極めて高いものと思われます。(大野康弘)



本丸北西堀切部調査区平面図 (1/120)



北西堀切発掘状況 (II 郭側から)



北西堀切発掘状況 (本丸側から)



本丸西北虎口前面付近精査状況 (西から)



本丸東切岸上・南北石列検出状況 (北から)